

新しい学力観を先取りした教育を展開 大学入試改革は むしろ「追い風」になる！

2020年度からの大学入試改革の内容が少しずつ見え始めてきた。2015年12月の「高大接続システム改革会議(第9回)」では、センター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」で、記述式の導入を打ち出すとともに、問題の具体例も示された。そうした状況下で「今回の大学入試改革は、本校が進めてきた教育改革の方向性と合致しており、むしろ追い風になる」と自信を見せているのが海城学園である。同校の教育プログラムの特色を、校長特別補佐・教育推進研究センター長の中田大成先生に聞いた。



高大接続システム改革会議が 具体的な問題例を提示

2015年12月の「高大接続システム改革会議(第9回)」で公表された内容についてのご感想からお聞かせください。

中田 2020年度から、大学入試は大きな転換期を迎えます。従来重視してきた「知識・技能」だけでなく、「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」を問う入試への転換を目指しています。けれども、それらの学力要素を、どのような問題を出題して、どう評価するのか、具体像が示されていなかったため、高校現場では戸惑いが見られま



海城中学高等学校
校長特別補佐 中田 大成 先生

した。とくに、センター試験に代わって導入される「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」(以下、「共通テスト」と記載)は、短期間で採点処理が求められるため、「知識・技能」以外の学力を評価する出題は難しいのではないかという意見も聞かれました。第9回会議で、「共通テスト」において、

マークシート方式だけでなく記述式も出題する方針が打ち出されるとともに、国語、数学、英語の問題例が提示され、具体的なイメージが明確になったことは大きな意義があると感じています。

記述式を導入することで、どのような学力の測定が期待できるのでしょうか。

中田 これからの子供達には「課題解決能力」が必要とされますが、通常課題解決のプロセスとしては、以下のような流れが想定されます。「まず必要な情報を収集する」「得られた情報を比較、分類し、関連づける」「その上で、推論を交えながら、問題解決の方法を探る」「最適な価値判断を行う」「自分で選択した解決方法を、論理構成を考へながら、適切に表現する」といったプロセスです。この一連のプロセスに

則した能力を測定するためには、やはり記述式が適しているといえます。ただし、「共通テスト」をすべて記述式にするのは、現実的ではありません。そこで、第9回会議では、厳然と分けて明示しています。つまり、「知識・技能」に関しては、これまでのセンター試験の多肢選択式や穴埋め式問題を残します。「思考力・判断力・表現力」を問う記述式問題は、「共通テスト」では「連動型複数選択+記述問題」(選択した解答に関する意見を記述させる)や「条件付記述問題」(説明・要約・作図など。問題例はPISSAの読解力テストの形式も踏まえている)などに限定して出題。創造性、独創性、芸術性などの評価も含む記述式問題は、各大学の個別試験で、自由記述式や小論文などの形で出題するという方向性が示されています。

新しい学力観を反映した 入試問題を作成

海城学園では、新しい大学入試にどう対応されるのですか。

中田 本校では、20数年来、「新しい学力」「新しい人間力」の育成を掲げ、学校改革を進めてきました。今回の大学入試改革は、その学校改革の方向性と



PAに取り組むことでコミュニケーション能力やコラボレーション能力を養います

社会科総合学習(中1~3)を通して課題解決能力を養います



合致しており、むしろ歓迎すべき状況にあると考えています。

実は、本校の教育方針は入試問題にも反映されています。PISSAやIB(国際バカロレア)のテストを研究し、「新しい学力」「新しい人間力」を測る入試問題を先駆的に導入してきたのです。たとえば社会科では、1992年度から、半分以上を記述式にしています。歴史、地理、公民の枠を超えた融合問題で、時事問題とも絡めています。そこで要求されるのは、文章、図、グラフ、絵などから必要な情報を取り出し、複数の情報を関連づけ、小学校で学んだ知識とも統合して、設問に答える力です。塾からは対策を教えるにくいと歓迎されませんが(笑)、まさに大学入試改革が掲げる新しい学力観を先取りしてきたわけです。また、帰国生入試で課す「総合」は、PISSAの読解力テストをモデルにしています。同じく帰国生入試で課される「英語」も、第9回会議で「参考資料」として示された問題例に類似しています。

つまり、本校の生徒は、新しい大学入試で重視される学力が必要とされる問題を、中学入試の段階から経験しているわけです。教員もそうした問題の作成に習熟しています。それが強みになることは間違いありません。

主体性・多様性・協働性を育む 画期的な教育プログラム

「新しい学力」「新しい人間力」を育む教育の例を教えてください。

中田 約25年前から、社会科で、自分

で設定した課題を調べ、レポートにまとめる総合学習を実施。中3では全員が原稿用紙30~50枚の卒業論文を仕上げます。理科でも実験・観察・巡検が豊富です。単純な知識の注入ではなく、生徒が主体的に課題を設定し、その解決法を考える学びを大切にしているのです。おそらく「共通テスト」で出題されるレベルの記述式なら、ほとんどの進学校が対応可能でしょう。難易度が高いのは、各大学の個別試験で課される高度な小論文や完全自由記述問題です。本校はそれにも十分に対応できる教育内容にすでになっているわけです。

生が身につけるべき「主体性・多様性・協働性」につながる能力なのです。

3つのポリシーを
連動させることが重要

今後、さらに強化したいと考えていることを紹介してください。

中田 2015年9月に高大接続システム改革会議が公表した「中間まとめ」で、大学に対して、「アドミッションポリシー(入学受け入れの方針)」「カリキュラムポリシー(教育課程編成・実施の方針)」「ディプロマポリシー(学位授与の方針)」を連動させた教育改革が提言されました。この3つのポリシーの整合性のとれた教育が重要になることは中高でも同じです。本校ではその点を強く意識しています。先ほど申し上げたように、中学入試では「情報を収集・分析し、深く考える力」「絶対的な真理がないかもしれない中で、最適な価値選択を行う力」「選択したものを周囲に分かりやすく表現する力」などを要求します。その私たちの思いに添って入学してきた生徒に対して、カリキュラムでは、「課題設定解決型」の授業や、主体性・多様性・協働性を育む教育プログラムを豊富に用意しています。それによって、卒業時までそれらの力の習得を保障することが、本校の使命だと考えています。そうした3つのポリシーをより緊密に連動させた教育を推進していけば、新しい大学入試制度はまったく恐れる必要はなく、むしろ本校にとっては「追い風」になると確信しています。

「主体性・多様性・協働性を育む画期的な教育プログラム」

「新しい学力」「新しい人間力」を育む教育の例を教えてください。

中田 約25年前から、社会科で、自分

「ドラマエデュケーション」も実施しています。この2つの教育プログラムに共通するのは、異質性の認識から学びをスタートするということです。成熟社会を迎え、価値観が多様化した日本やグローバル化が進む海外では、異質性を前提としたコミュニケーション力、コラボレーション力が不可欠になるからです。一人ひとりの考え、個性の違いを乗り越えて、お互いの良さを引き出し合って、高い成果につながる